



ふくしま 水産普及だより

No.77

17. 1. 1

福島県
水産事務所



年頭挨拶

農林水産部生産流通領域
水産グループ参事 石川 幸兒

平成17年の新春を迎え、漁業に従事されております皆様方ならびに水産関連業界の皆様方に謹んで年頭のあいさつを申し上げます。

昨年を振り返りますと、オキアミについては前年を大幅に下回り、また、底魚類も全般的に減少傾向にありましたが、コウナゴ、マガレイ、イシガレイについては漁獲量、金額ともに昨年を上回る結果と明るい兆しもみられました。しかしながら本県の水産業は以前にも増して漁獲量の減少、漁業従事者の高齢化や担い手不足など厳しい状況に直面しております。

そうした状況の中、県といたしましては、先に策定した「うつくしま水産業プラン21」の下、豊かで魅力ある水産業を実現するため新たな施策を展開しているところであります。特に、資源管理型漁業の高度化を図るため、本県重要魚種の資源診断とその回復指針の策定を進め、漁業者の皆様自主的な取組みを支援してまいりたいと考えております。さらに、「おらが浜の自慢料理道場」や「水産物学校給食推進事業」など地域自慢の浜料理発掘と新たな需要の開拓に取組み、本県で生産される水産物の消費拡大を支援していくと考えております。

また、漁業協同組合の再編整備につきましても、県漁業協同組合連合会を中心に一県一漁協の取組みを進めていると伺っておりますので、県といたしましても系統団体、関係市町と連携を図りながら引き続き支援していくと考えております。

最後に、本年も水産業の振興に向け、より一層努力していく所存でありますので、今後とも御理解と御協力をお願い申し上げます。新年のごあいさつとさせていただきます。

第5回は、本県北部の沿岸から沖合を中心に広く分布し、重要な漁獲対象魚種であるマガレイの資源状況について取り上げます。福島県における漁獲金額は平成12年以降3～5億円を推移しており、近年減少しているものの、底魚類の上位を占める魚種です。

1 漁獲量の推移 (図1)

- ・福島県における漁獲量は、昭和50年代に1千～3千トン記録していましたが、昭和59年から1千トンを下回り、平成6年までは200～600トン程度を推移しました。
- ・平成7年以降やや増加し、11年には1千トンを超えましたが、12年以降は400～600トン程度と若干減少しています。
- ・漁獲量の増減は、稚魚の発生量やその後の生き残りの良否に左右されます。近年のマガレイでは平成5年から10年頃にかけてそれらが良好な年があったようですが、過去にみられた高水準の漁獲量には及んでいません。

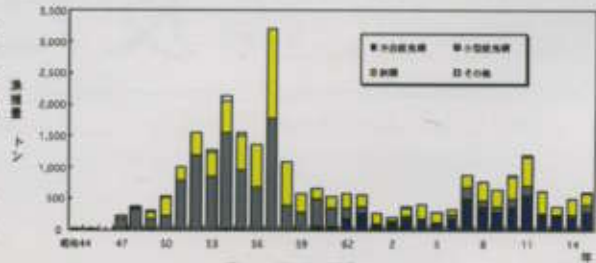


図1 マガレイの漁獲量

2 漁獲物からみた資源の状況 (図2)

- ・平成16年に底びき網で主に漁獲されている全長20～25cmの個体は、平成14年生まれの子で、昨年からの漁獲の主体となっていたことからみて、この群の発生状況は良好であったと考えられます。
- ・全長組成の推移から、近年における資源の発生水準を高い順に並べると、平成14年生まれ>平成12年生まれ>平成13年生まれとなります。
- ・また、平成13年以降はどの年も1、2歳魚が漁獲のほとんどを占めています。マガレイが本格的に成熟するのは、雄で2歳以降、雌で3歳以降であり、産卵に参加せずに漁獲されている若い個体の割合が高くなっています。

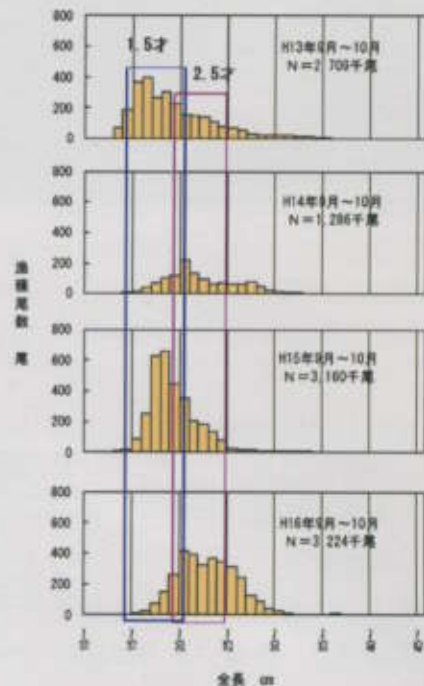


図2 マガレイの全長組成 (底びき網水揚げ)

3 魚価の状況

- ・平成16年9～10月における底びき網での平均単価は401円/kgでした。漁獲物の全長組成が類似している平成14年同期の平均単価873円/kgの1/2以下となり、全長15～20cmの小型魚が主体だった前年同期の378円/kgと大きな差はありませんでした。
- ・平成16年9～10月の漁獲量は440トンで、平成14年同期の2.7倍と大きく増加していることも単価の下落に関係しているものと考えられます。

4 まとめ

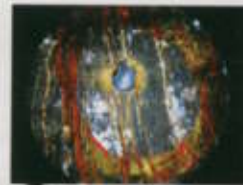
近年のマガレイ資源は、稚魚の良好な発生がみられることにより、増加の兆しが見えています。しかし、発生した資源の多くを1、2歳の小型魚のうちに大量に漁獲していることから、稚魚の発生水準の低い年が続けば、漁獲量は急激に減少します。また、短期間の大量漁獲による魚価の低下、再生産資源(親の数)の維持にも課題が残ります。資源加入が良好な今のうちに、なるべく小型魚を多く残す工夫をして、マガレイの有効な利用を図っていききたいものです。

表1 9、10月の底びき網によるマガレイの漁獲量と平均単価

漁獲量	kg			
	平成16年	平成15年	平成14年	平成13年
9月	267,899	147,050	100,019	108,334
10月	172,235	108,227	64,865	59,632
合計	440,124	255,277	164,884	167,966
平均単価	円/kg			
	平成16年	平成15年	平成14年	平成13年
9月	352	333	812	562
10月	477	439	967	849
合計	401	378	873	664

マダコはアワビの天敵

マダコは、アワビを食べる時、始めにその強力な腕力でアワビを岩から剥がして食べようとします。どうしても腕力で剥がせない時には、アワビの貝殻に小さな穴を開け、そこから毒液をアワビに注入し、アワビを麻痺させた後に食べます。このため、マダコに食べられたアワビの一部には、貝殻上にマダコが開けた楕円形すり鉢状の特徴的な穴がみられます(写真)。アワビ貝殻を回収して、この穴(穿孔痕)のあいている貝殻の割合を調べ、更にマダコがアワビを食べる際に穴を開けて食べる割合を調べることで、アワビ死亡原因に占めるマダコ食害の割合が推定できます。



マダコはアワビを捕食する時、まず腕力で引き剥がそうとします。しかしそれが不可能な時、貝殻付近の貝殻に穴を開けて毒液を注入し、麻痺させて捕食します。
穴は楕円形のすり鉢状で、他の動物が開けた穴とは容易に区別できます。



平成6～8年にいわき市小名浜下神白地先に打ち上がったアワビ貝殻2,306個を回収し、マダコがアワビを食べる際に残す穴の有無を調べた結果、約31%にあたる707個にこの穴が認められ、アワビの殻長が大きくなると穴がある割合が増加する傾向がみられました(図1、2)。

また、水槽実験で、マダコがアワビを食べる際に何%のアワビの殻に穴を残すかを調べた結果、殻長50mm以上のアワビでは約50%のものに穴がありました。これらの結果から、アワビの殻長別に死亡原因に占めるマダコ食害の割合を推定したところ、殻長50mmでは約40%で、殻長と共に割合が増加し、殻長120mm以上ではほぼ100%がマダコによる食害であると推定されました(図3)。また、天然貝よりも人工種苗貝の方がマダコ食害に遭いやすいことも分かりました。

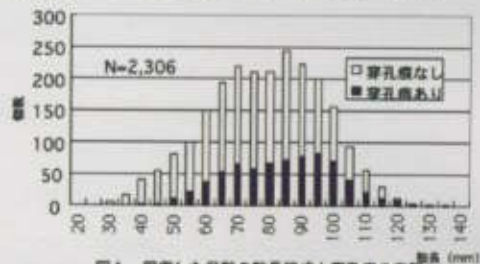


図1 回収した貝殻の殻長組成と穿孔痕の有無

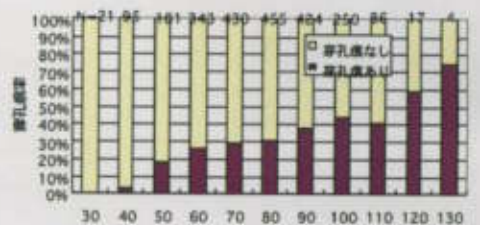


図2 アワビ貝殻の殻長別マダコ穿孔率

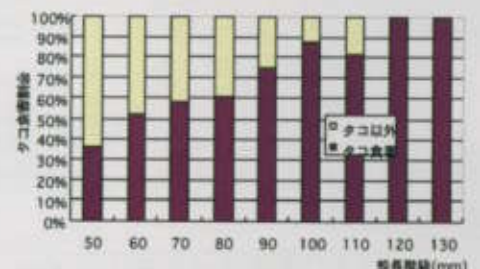


図3 殻長別死亡原因の推定結果

更に、様々な殻長のアワビ貝殻に標識を付け、漁場に散布し、貝殻が海岸に打ち上げられる割合を調べた結果と併せて考察した結果、マダコの生息の多い年には概ね年間のアワビ漁獲個数に匹敵するアワビがマダコに食害されているものと推定されました。最近では2002年にマダコが多く来遊し、アワビ資源に非常に大きな被害を与えました。

この結果から、アワビ漁場でマダコを積極的に駆除することは、アワビ資源維持に大きな効果があるものと考えられました。(水産試験場栽培漁業部)

技術交流(先進地視察)報告

「産地直販及びナマコ種苗生産について」

1. 研修グループ 相馬双葉漁業協同組合新地支所青壮年部
2. 研修年月日 平成16年6月21日(月)～22日(火)
3. 研修場所 八戸みなと漁協八戸活魚協議会
青森市水産指導センター
4. 研修概要



八戸活魚協議会では、協議会の結成から遊漁船業、活魚出荷などの事業や組織運営に携わっている八戸みなと漁協組合員等と交流会を行い、直販活動や活魚出荷のPR方法などについて意見交換しました。また、青森水産指導センターでは、ナマコの種苗生産施設を見学し、ナマコの生態や陸奥湾での資源管理などの講義を受け、今後の新地の磯根漁業の在り方を考える良い機会となりました。

「市場の衛生管理とハタハタ資源管理について」

1. 研修グループ 小名浜漁業協同組合小型船研究会
2. 研修年月日 平成16年6月20日(日)～22日(火)
3. 研修場所 秋田県漁協南部総括支所
秋田県水産振興センター
4. 研修概要



南部総括支所では、平成14年3月に魚市場を新築し、市場への車両進入禁止と、市場関係者の靴の統一(洗浄の徹底)をしたそうです。また、定置網の漁獲物は殺菌海水で洗浄しており県内では水揚魚を直置きしている市場はないとのことでした。

秋田県では、ハタハタ漁獲量がピーク時の100分の1以下(平成3年:72トン)になってしまったので、平成4年から3年間ハタハタを全面禁漁したそうです。あわせて種苗放流、産卵場造成、解禁後の全長制限(15cm)、漁獲量の上限設定等の取り組みを実施したところ、漁獲量は右肩上がり増加したとのこと。(平成15年:3,000トン超)



新規漁業就業者を紹介します。

- 名 前: 吉田甲二さん(昭和59年1月生まれ)20歳
所 属: いわき市漁協青壮年部久之浜支部
船 名: 幸運丸(4.8ト)

本人談話

この仕事に就いて3年目になります。

兄弟は兄、自分、妹、弟の四人。兄は陸(おか)の仕事に就いており、今年、高校を卒業する弟は進学予定のため、現在は父親と自分、乗り子さんの三人で船に乗っています。自分も高校在学中は、卒業したら陸の仕事を考えていましたが、不況の影響もあり、希望に合う仕事がありませんでした。

船びき網、ホッキ貝けた網、ハモドウ、刺し網等をしていますが、揚げるカゴ数も多いオキアミが一番大変、また、魚探や漁具の扱いを覚えるのも難しいです。

今は、休みに学生時代の友人達と遊びに行ったりするのが楽しいです。